

藤平春男著『新古今とその前後』

田 中 裕

藤平教授の新著『新古今とその前後』の書評を仰せつかったことに面立たしさを感ずる。「あとがき」を繕いて所収の論考の原題名や発表年次を眺めていると、拝見したその折々の記憶が鮮やかに蘇ってくる一方、これらの幾つかの方向、象面をもつ論考を通して著者が関心をよせ、追究してきたものが何であったかについて思いを新たにすることも多い。

すべて三章に分けられているその第一章は「新古今の方法」、第一節は「表現の特性」であるが、著者も記しているとおり、これは前著『新古今歌風の形成』の最後におかれた論考「新古今の方法」で取りあげられた課題の展開であると知られる。前著は、新古今時代の歌壇史の重厚な研究を「基底」とし、それとの密接な関連において俊成・定家の基本的態度、志向、またそれにもとづく作歌方法を両者の歌論にしたがって省察したものを本論としたものであったから、やがて課題が新古今の表現に求められることは必然であり、前記論考はその最初の実践であった。そこで示された幾つかの見解のなかでも注目されるのは、定家の表現といひ衆、けつして単一でないことを例示するほか、集中の古歌が集

の「美意識の原郷」であること、しかもその扱い（配列等）にまさしく新古今的なものが顕現しており、そこにも単なる復古主義でない集の中世的性格が認められるとしていること等であった。

右の論考は「新古今の方法(一)」として再録されているが、これを承けた「方法(二)」は「表現の特性」を最も忠実に追った論考で、新古今歌風の特性と考えられる一首のきわやかな完結性・独立性、いいかえれば「美的小世界」の形成されている理由を「声調」「本歌取」「句の断切」「詠歌主体の視点」等の諸点から明らかにしようとする。指摘されていることがらが多いが、まず注意されるのは前提となる美的小世界の形成ということについての優れた叙述（三七頁以下）、また一首の完結性・独立性ということについても通例の意味のほかに、本集ではその配列の力によって、それらが原の歌集や定数歌中にある保持されていたのとは異なる、むしろより十分な表現性をもって引出され、顕在化している一面の指摘である。「方法(三)」は「抒情のありかた」で、これは新古今歌風の特性を支えるものとして虚構歌と実情歌を立て、これに、やがて京極派和歌（八〇頁以下参照）に至って完成する純自然観照歌を併せて論じる。虚構歌については四四―四七番歌を例に、その種々性を考察しているが、虚構性いいかえれば「作者の直接体験からの離脱」の企図の極とされる四四番の定家歌の解説は、書中に多い同様な記述のなかでもことに行届いたものである。これらと対照的に捉えられているのが西行の歌を例とする実情歌つまり生活抒情歌であるが、結局両者は「自己観照の厳しさ」において共通するとされ、そこに集の抒情の特性も見出され

ているが、この点こそ著者の持説である「もとのころ」「有心」の問題にはかならず、したがってそれらを詳説した前著はもとより、後出の論考「幽玄と有心の系譜」が説合わされなければならない。西行に関する論考も書中に多く、また多くが俊成・定家との比較でその歌風を説くものであるが、第三章第二節の二論文、とくに「俊成・定家と西行」には、それぞれの方法の相違の背後に、前者の「古典」に対する後者の草庵「生活」があるとする指摘も見えて参看を要する。

第二節「方法の枠組」は、新古今的方法の契機となる「題詠」「本意」「本歌取」を各論的に扱う。まづ「題詠」を第二論文「題詠の成立」について見ると、はじめに題概念の整理が志されているが、それについて結題、句題、詠物題、寄物題の各特徴、変遷が記述されるときに、題相互の関連も見失われず、やがて題詠が確立するに際してその主軸となったものと付加的なものとが区別され、同様の意味で勅撰集の部類や配列、部類名家集・詩撰集の分類標目立て、百首題、歌合・歌会での題詠等がそれぞれ果たした役割も考慮される。ほかに勘合されている点も少くない上、叙述は要約的なのでやや晦渋の憾みがある。「本意」の項でもっぱら扱われているのは伝統的な意味での本意つまり題である「事物の美的本性」ではなくて（それはむしろ「題詠」で関説されている）、著者が早く『古来風体抄』の上でその意義を認めて考察をとげた「もとのころ」即ち「美的認識の主体としての心」とされているものである。それは在来の本意の觀念を大きく脱皮させることによって新古今的方法の根底となり、定家『毎月抄』の有

心体の「心」にも継承されたと説く。さらにこの本意思が突然変異的で、以後継承されることなく終ったとするのも重要な提言であるが、これらは第二章第四節の前記「幽玄と有心の系譜」および「鶉鷺系歌論書」において幽玄、有心の側から説かれているもの（後述）と論点が重なっており、相互に参照されなければならない。「本歌取」も概念規定のなかつた落着かない術語であるが、著者は関係字書の比較検討ののち、とくに『井蛙抄』の分類を手がかりに整理を試み、私案を掲げる。今後の規準となるべきものであるが、また定家の本歌取説にもとづき、本歌取がとりわけ新古今的方法として機能した理由を明らかにしている部分（一四七頁以下）も優れた叙述である。

第二章「歌論史的展望」は、俊成・定家の歌論思想を核とする新古今時代の諸歌論を『歌経標式』以来の流れのなかで捉え直した第一―三節と、新古今以後のそれを幽玄・有心論を中心に考察した第四節とから成っている。そのうち第一節「俊成以前概観」は透徹した通史で、たとえば『和歌体十種』、公任の歌論について、まだ技術論以上の歌論を要求することのなかった歌壇のなかから両者の現われた意義を評価しているのは確論と思はれる。

第二節は、前半に右の両歌論の考察、後半に「源俊賴の歌論と作品」を配しているが、後者は分量・内容ともに充実した雄篇である上、私一箇のことをいうのは恐縮であるが、これまで看過してきた対象でもあり、示教されるところが頗る多い。就中示教されるのは前述の実情歌と虚構歌とをめぐむ問題——その一つは前者から後者へと展開する、その間の消息であるが、一つは虚構歌

の確立した新古今時代でさえ、なお前者が強くその存在を主張している事情である——が、すでに素朴な相で俊頼のなかに孕まれているとする指摘である。その考察は俊頼の歌論・作品のもつ多面性に即し、かつ彼の生や歌壇史的状況も視野におさめて精彩に富む。さらにもう一つ興味深い叙述をあげれば、公任の歌論から俊成・定家への展開を媒介する彼の役割、とりわけ公任との間に見出されている相承と背反との関係である。

第三節は新古今時代の歌論、主として顕昭、長明、後鳥羽・順徳院、俊成・定家のその考察である。そのうち『無名抄』の幽玄体説について「まさに俊成・定家の路線における実作上の完成態だが、そこには開拓者創造者の厳しさが欠けている」と評しているのは、後の第三章第二節の「鴨長明の文学」にもみえる見解であるが、同様の批判は『八雲御抄』について「あの俊成・定家にあつた尖鋭な芸術認識ないし美的存在論の自覚を欠く」というところにも見え、読者の考察を誘うようである。また「定家歌論の成立」「後鳥羽院の『定家評』」は著者の最も新しい定家論として重要であるが、部分的にも前者では『三体和歌』の歌論的解釈、『定家十体』の扱いが注目され、後者では院と定家との歌観の対立を説く叙述のほか、『御口伝』の所説と『八雲御抄』のそれとを対応させる扱いも注目される。両院の所説をほぼ共通と認めてのものであるが、右の論考は次の第四節「新古今以後」の二論文、とくに「鶺鴒系歌論書」に直接つながってゆく。即ちこの論考は、かく共通性をもつ両院の歌観が鶺鴒系歌論書の源流となること、したがってまた以後の中世歌論の主流をなし、これらと対立

する俊成・定家の歌論は本質的には継承されなかったという見解に導かれていくからである。新鮮な、したがってここにもまた種々の考察を刺激するものが提示されているように思う。

第三章は「和歌史の諸問題」であるが、そのうち第一節の「院政期歌壇の性格」は、先行の諸説の検討を通してこの期の歌壇事情の複雑さを指摘しつつ、その最末期文治元・二年に中世和歌史の始まりを見出しており、第二節「新古今前史の問題」、第三節「藤原定家雑考」は、俊成・定家を中心に西行、長明を論じているが、その幾つかはすでに参照を願っているので割愛したい。第四節「考証雑説」は『道助法親王家五十首和歌』『毎月抄』のほか、西行に関する諸考証を含み、「付章」として巻末に添えられた対談は書中の主要な見解の要約となっており、好個の手引である。それに較べ、書評に藉口した如上の記述の、おそらく手引にも足りないことを恥じているが、せめて論旨について大きな誤解、軽重のおき違えのないことを祈るばかりである。著者は私のためには最も良い、そして最も長い同行の一人であり、これまで拙論に共感していただいたこともあったと同時に、その錯誤、不審、不整合を指摘されたことも少くない。これに対し弁明あるいは再思の結果を詳らかにする義務を感じているが、もとよりこの一文のよくするところではなく、著者ならびに読者の寛恕をこわなければならぬ。

(昭和五十八年一月 笠間書院 九、五〇〇円)